

「であい・ふれあい・まなびあい」から
「つながりあい・ささえあい」へ

おおつ! おおおか! 再発見 大岡集楽学校

大岡全十区をフィールドに歩きながら考える『集楽学校』。第四回目は川口。「であい・ふれあい・まなびあい」から「つながりあい・ささえあい」へをテーマに、今年と来年で大岡を北から順に探訪していきます。各区をめぐりながら、地元の方からの説明や宮下先生の解説を交え、先人の声に耳を澄ませ、地域に伝えられた文化を掘り起こし明日の『集楽』を皆で共に考えます。

其之四
川口
かわぐち
平成27年
10/18 (日)



川口コース概略
支所前バス受付

開校式 ●川口地区センター

- ① 安賀沖田園風景
- ② 梨木地区 熊野大神社
- ③ 梨木石造仏群
- ④ 小松坂旧通学路と供養塔
- ⑤ 道の駅 地層
*昼食 ●川口地区センター
川口の方による協力
- ⑥ 健大岡神社(神楽舞)
- ⑦ 川口地区めぐり
橋木橋・船着場・筆塚・道祖神
●川口地区センター
火おこし
- ⑧ 講師のお話・座談

主催/大岡住民自治協議会
川口区
共催/長野市大岡支所
大岡中学校・大岡小学校



聖山

① やすか おき 安賀沖田園風景

大岡随一！ 十町歩の水田風景

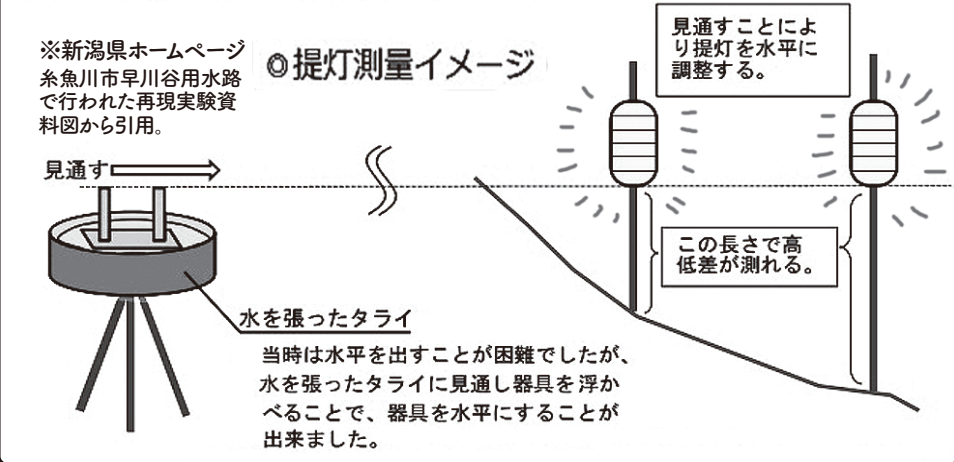
安賀地区は犀川沿いの段丘地域で、山あいの村が多い大岡のなかでは比較的大きな水田風景が広がっています。水は聖山西麓に発する清流「樋ノ口沢」から「安賀水路」へと導水されています。樋ノ口沢は上流から一里二十町（六二九〇m）の旅を終える頃には水温が若干上昇しつづき、安賀（安川）地区で犀川と合流します。広々としたこの田園風景は以前からの水田を昭和に入ってから大規模に拡大・耕地整備したものです。現在耕作者は安賀・川口居住者のほか、八坂栃沢からやってくる人もいます。



「提灯測量」で 稲作拡大に挑んだ

往時の開田は樋ノ口沢沿いの宮平から下流へは約六キロの長い「梨木せぎ」によって梨木地区へ、「安賀水路」を切り開くことにより安賀地区へと拡大していきました。現在のように土木機械や水平器具も無く、安賀の水田は夜間に提灯を自印に測量を行い勾配を決め用水路を引く「提灯測量」が行われたと伝えられています。

【提灯測量とは】江戸時代から明治時代の測量技術で、提灯やろうそくの明かりを使用し高低差を測量したと言われています。残念ながらその測量方法は明確に残されていませんが、夜になると提灯を持って山へ入り、その提灯を上げ下げすることで土地の高低を測り、水路を作ったと言われています。



ちようちん 測量？

よりみちMEMO

再現実験で見通している様子（糸魚川市）

梨木・安賀・川口地区は犀川や棚原沢に近くても地形的にその水は利用できず、水を得るために長大な「せぎ」や「水路」を必要とした。

2 梨木熊野大神社

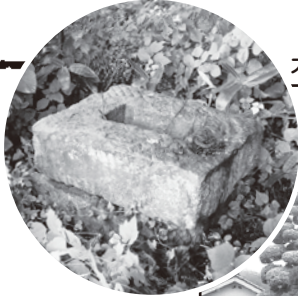
国生み神話の二尊を祀る

梨木の熊野社の勧請経緯はよくわかっていませんが、周囲には大木もあり長く信仰されてきたようです。明治十四年の大岡村誌には、伊弉諾尊、伊弉冉尊（イザナギノミコト・イザナミノミコト）が祭神と記されています。日本書紀に国土を生み、数々の神々を生んだと記される神様たちです。火の神を生むときに、陰部に大火傷を負って死んでしまった女神のイザナミの遺体は紀伊国熊野の有馬村「花の窟」に葬られたと伝わり、熊野の人々は花のときは花をもつて祭り、鼓・笛・幡旗をもって歌ったり舞を奉げたといわれます。

熊野三山を信仰し各地へ信仰を広めた熊野修験たちは、本宮をスサノヲ、那智の神をイザナミ、速玉の神をイザナギとし、修験道を介して神道と密教（仏教）が一体となった「熊野信仰」を全国に広めました。鳥居の近くには大幟を立てる大きな石も残り、かつては盛大に祭りが行われていたことをうかがわれます。



鳥居に熊野大神、堂内の灯笼に熊野社と書かれている。



大幟を立てた石



◎梨木の風景



熊野社南側の急斜面は雪解けが一番早いので、麦畑があったという。

梨木地区は上村・下村があり、田は樋ノ口沢の水を引き、この水をさらに安賀に引いている。養蚕農家の面影を残す家も。山裾には湧水流があり、正月には暗いうちから競争で若水汲みに行ったという。地区内に道祖神、筆塚もある。

3 梨木石造仏群

庚申塔 オコシンサマ

彫られている仏尊像は青面金剛（しょうめんこんごう）で庚申信仰の神体本尊。梨木の石像は六臂で手に、法輪、弓矢、鉞、羅索などを持っているように見える。その恐ろしい姿から、邪気や悪病を払うとされ集落入り口に祀られることが多い。庚申の晩に皆が集まり、寝ないで夜を明かす講は楽しみの少ない時代の行事でもあった。眠っている人間の体内から抜け出し天に悪行を報告するの猿と鶏を刻むことがあるのは庚申の申（さる）にかけて猿が三匹の猿が四匹の場合「見ざる・言わざる・聞かざる」が刻まれる。

彫られている仏尊像は青面金剛（しょうめんこんごう）で庚申信仰の神体本尊。梨木の石像は六臂で手に、法輪、弓矢、鉞、羅索などを持っているように見える。その恐ろしい姿から、邪気や悪病を払うとされ集落入り口に祀られることが多い。庚申の晩に皆が集まり、寝ないで夜を明かす講は楽しみの少ない時代の行事でもあった。眠っている人間の体内から抜け出し天に悪行を報告するの猿と鶏を刻むことがあるのは庚申の申（さる）にかけて猿が三匹の猿が四匹の場合「見ざる・言わざる・聞かざる」が刻まれる。



道路の拡張で一同に集められた石造仏や石祠。道路脇のこもりした小山に大乘妙典日本廻国、庚申、馬頭観音（二頭）、如意輪観音、二十三夜塔がある。谷側には舗装道路が開通する前の旧道が残っている。

大乘妙典日本廻国供養塔

六十六部廻国聖が日本全国六十六カ国を巡礼し、一國一カ所の霊場に法華経を一部ずつ納め終えた功徳を回向する供養塔。鎌倉幕府成立期の有力者の前世を六十六部廻国聖とする伝承が定着し廻国巡礼の起源にもなったとも云われる。

馬頭観音（二頭）

かつては馬が移動や荷運びの大切な役割を果たし、路傍には亡くなった馬の供養塔でもある馬頭観音が建立され、道の安全を祈願した。梨木に残る馬頭観音は、文字を彫った素朴なものだが、二頭分を刻む珍しいもの。建立者には心を通わせた二匹の忘れたい馬の姿が浮かんでいたことだろう。



4 小松坂と供養塔

こまつざかーくようとう
 思い出の古道「小松坂」
 温かなエピソード伝わる。

建大岡神社の後上方は古く城郭があった北小松尾地区です。かつては北小松尾と川口地区とを短距離で結ぶ古道がありました。北小松尾に分校のあった頃（昭和三十六年頃まで）はこの急峻な山道「小松坂」が川口の子どもたちの通学路ともなりました。雪の降った朝は「親さま」と呼ぶ地区の大人が交代でこの道の雪かきをしたのだそうです。

当時はこの道を日原郵便局の配達員が一日に2度背負子で郵便物を背負って宮平郵便局まで運んだ、学校へ行かずに一日山で遊んでいた子が帰りにまたいた…などのエピソードがたくさんありますが、今は歩く人も無く道は消えつつあります。

この道の途中に供養塔のある一角があります。石仏は百観音巡礼供養塔で、富士・立山・湯殿三山と彫られています。山岳修験で有名な霊場巡礼を終え

戻った人がその利益功德を回向するために建立したものと思われれます。ほかに、文字の一部が「庵主」と彫られた僧侶特有の墓石「卵塔」や五輪塔の火輪が近くに残っています。

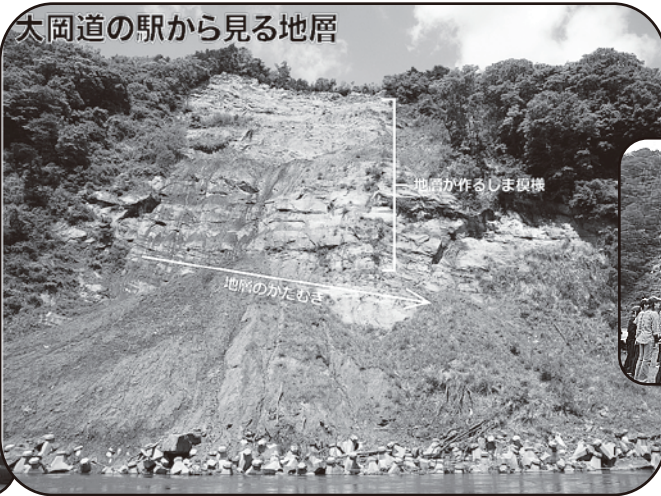
5 道の駅と地層

みちのえきーちそう
 出発は岩魚の加工販売所。
 対岸の海底地層も見所。

昭和六十三年、大岡村は山村振興事業で岩魚の加工場を整備したので農産物とあわせて販売する場所を整備することにしました。平成二年四月にオープンし、当初年間売上げは約一億八〇〇万円、村民雇用所の役割も果たしました。その後、多くのドライバーが中央高速道を利用するようになり、国道十九号線の通行量が激減、平成八年からはJAに運営委託するなど体制一新を迫られました。現在は特色ある大岡の味覚や物産の発信場所としての人気も定着し、安定した賑わいをみせています。道の駅の犀川沿いの対岸は、大きな崖壁に約四〇〇万年前の海底地層が斜めに現れて人目を引きまします。堆積物が重力ですべり傾いたスランプ構造や「サンドパイプ」といわれる生物のはい跡観察は大岡ならではの、貴重な地球の記録を学ぶ場です。



小松坂の供養塔。お守りしている本間さんの家では「経塚きょうづか」と呼んでいたという。建立とともに納経もされているのかもしれない。



小学校の地層学習にも利用されている。

大岡の物産と味覚で賑わう道の駅 長野市大岡特産センター



信州新町化石博物館HP 地層学習案内より



川口南地区の舟渡し場付近に僧や尼僧等の墓跡があり、今も地区でお守りしている。



安賀六地藏

文化往来の地

川口の観音堂・阿弥陀堂、安賀の六地藏
 日合にちあわせ地名考



古い歴史のあるお堂も時代の変化とともに無住になり村人が守り継ぐことが多い中、寛文元年（1661）建立の川口の観音堂には幕末まで堂守がいたと伝わります。また、安賀地区には安永2年（1774）建立の六地藏の石像が今もあり、仏教文化の足跡を伝えています。「日合」の地名由来はわかっていますが、陰陽道では、一日のうちで「吉」とされる時刻を「日合」（にちごう）と書くようです。大岡一山へ吉祥が入ってきますように…という往来の盛んな地ならではの名残りのなかもしれません。

6 郷社 建大岡神社

池を配した静かな境内。

明治四年に神祇官によって指定された大岡地域近在の郷社（村社の上に置かれた格式）。川口を一望する日合（にちあわせ）地区山裾にある。祭神は建御名方命（タケミナカタノミコト）・八坂斗賣命（ヤサカトメノミコト）。明治十四年の村誌には大歳神も記される。名称は元祿の堂宮書上げに「大明神」宝曆九年（二七五九）の神社一覽に「諏方大明神」。天保九年（二八三八）に火災にあい、安政三年（二八五六）に再建された。参道入口に御水滴ノ池、境内には本殿の正面に舞台、手前に土俵の跡、古木、合祀された祠、明和八年（二七七二）造立の常夜灯がある。例祭は八月二十三日、ほかに一月七日御筒粥祭りが伝えられている。



舞台：池に面した板壁に鯉が描かれている。



鳥居と参道



御水滴ノ池

神さまに喜んでいただき加護をいただく「お神楽」を見せるために舞う西洋芸能やイベントのエンターテイメントと違う、これぞ文化だネ。

大岡住民に益々の幸せの
良い兆しがありますように
集楽学校スペシャル！
特別獅子神楽奉納！



長野市指定無形民俗文化財
川口・建大岡神社の獅子神楽

春と秋の祭礼で地区の若連の手によって奉納される獅子神楽は二人立ちの太神楽（獅子を舞わせて魔を払い、祈禱する神楽）。現在の舞は五部構成で、一、道中囃子（道行き）二、幌舞（獅子頭で幌前を絞ったり広げたり左右に振り回す）三、御幣と鈴の舞（五穀豊穰や天下泰平を祈る舞い）四、狂い（さらばなーさらばさらばと東西南北くと唄い獅子の口をパクパクさせる）五、後囃子、の構成になっています。

川口集落センターに大切に保管されている獅子頭。かつて大岡の各村で伝承されていた神楽も途絶えた地区が多いなか、川口の神楽は五部構成の形態を伝えて貴重。

本殿のかえるまた装飾

梶の葉と墓又
諏訪社



諏訪神社ゆかりの「梶の葉」は七夕飾りの短冊や、神前の供物を供える葉とされ、『吾妻鏡』によるとすでに平安時代末に諏訪明神の神紋とされていたようです。建大岡神社本殿は正面の墓又に「梶の葉」、左右には「十二菊・菊水」が施されています。寺社の建築に用いられる「墓又」（かえるまた）は元々は上部の重さを支える建築部材ですが、ここに彫刻彩色して、ゆかりの絵柄を表す役割もあります。

大岡の大地に
しつかりと土台が
つながる郷社



建大岡神社の本殿の土台は、床張りの拝殿が加えられた現在も土の上に置かれています。土台が大岡の大地に常に接し、拝殿は地主の神さまと向かい合い拜する場所となっています。また、掛造りの寺院建築では観音堂が岩に接し観音像も岩と接していることが多いといえます。

「諏方大明神」から 「健大岡神社」への神社名の変更

宮下健司

神道と神社

現在、川口の南方日合の宮禰地籍に鎮座する大歳神・健御名方命・八坂斗売命を祀る健大岡神社の敷地は八〇〇坪と広い。

神社（じんじや・かむやしる）は日本固有の宗教である神道の祭祀施設である。神社はまた、その施設を中心とした祭祀儀礼や信仰を行う組織でもあり、鳥居内の区域を「神霊が鎮まる神域」とみなしている。しかし、日本の神道には他の宗教にある教祖も教義も救済もない。

神は目に見えないものであり、したがって神の造形も生まれなかった。最初、神社には社殿もなく、神聖な山、岩（磐座）、滝、巨木、森などが神の宿る特別な場所として敬まれ、生活に関わる山や岩、木、森とは区別されていた。

やがて、六世紀の中ごろ「異国のカミ」として渡来した仏教寺院の影響を受けて社殿も建造されていき、さらに平安時代以降には仏像の影響を受けて、神像彫刻も造られるようになった。社殿ができる建物内部に空間が生まれ、その空間が封印されることで、日常の俗なる空間とは区別された聖なる空間となつて、神社・社殿の神聖性が高められていった。

神社のまわりにはあるがままの自然を残した鎮守の杜（社叢）がとりまき、神池があつ



川口地区の人々と玉串を捧げて調査開始。

ても庭園はない。その入口に俗界と神の世界との境界を画する鳥居があり、鳥居をくぐると社殿に通じる参道や階段があつて、社殿近くには神の依り代となる御神木が植えられた。

吉田神道家と神社名の変更

健大岡神社の江戸時代の記録をみると、元禄一〇年（一六九七）の「松代藩堂宮改帳」では、「大明神五尺三寸 宮有」とあり、宝暦九年（一七九五）の「松代領神社書上」においては「諏方大明神 社人 平川兵庫一社」となつてゐる。

江戸時代の中期になると、各神社に所属する御師（おし）たちの布教活動によつて村の中に伊勢・三峯・金比羅、御嶽、戸隠などの様々な神仏信仰が入つてきて祠や石碑が立てられ、伊勢講や三峯講・戸隠講などができていった。いっぽうで村の産土神、氏神の多くは地域名などを表すのではなく、祭神から「諏訪大明神」、「諏訪社」などと呼ばれており、隣村でもほとんど同じ神社名であつた。こうした状況下で、江戸後期になると神社名の変更が各地で

なされるようになっていった。

しかし、いくら権力を握つた將軍でも神様からみの問題については処理できなかつたのである。本来、神様に称号や位階を与える権限を有したのは天皇であつた。それを京都の吉田神道家ができたのは、その権限を天皇から委任されていたからである。つまり、神様に關する諸事方端の処理能力を万人が認めていたのが吉田家であつた。武家政権の欠陥を埋めるべく重宝されたのが「吉田の神主」で、吉田家は神を自在に操る神使いでもあつた。

吉田神道は室町時代に京都吉田神社の神官吉田兼俱によつて大成された神道の一流派で、唯一神道、卜部神道、宗源神道ともいわれた。兼俱は朝廷と幕府の支持を背景に「神祇管領長上」という称を用いた「吉田の神主」として「宗源宣旨」「宗源神宣」を發行して、地方の神社に神位を授け、神職の位階を授ける権限を与えられて、吉田家を神道の家元的な立場に押し上げていった。江戸時代までは宗教が人々の心を安定させるうえで、大きな役割を果たしていたのである。

江戸時代になると、徳川幕府が寛文五年（一六六五）に制定した「諸社禰宜神主法度」において、吉田家は神道の本所として全国の神社・神職をその支配下におき、幕末まで続いた。

「諏方大明神」から「健大岡神社」へ

川口村の産土神であつた「諏方大明神」は、文政十一年（一八二八）十月二十一日に神祇道管領長上正三位侍従卜部朝臣良長によつて「健大岡神社」に神社名が変更されたのである。それを証明する吉田神道家が發行した「宗源神宣」「祝詞」「幣帛」の三ツセツ



建大岡神社の 秘宝調査成る

前回（平成二十五年八月）の下見の際は、外からの拝観でした。その後、川口地区の皆様のご協力を得て、十月三日夜、神主さんにお祝いと奉祭をお願いし、秘蔵の宝物を拝観させていただきました。いままですべて詳しい調査をしたことがなかった建大岡神社内殿の扉が開かれた瞬間でした。



◎錦織の箱 ◎朱塗りの箱





一間社流造りの本殿。正面の臺又には諏訪社の梶の葉紋。



御神体の大きな柄鏡（鏡部径約30cm）



御神体の重い自然石（長辺約30cm）

トが本殿内に保管されていた。

新しい神社名にしてもらうために川口から氏子総代等が上京して、吉田家にお願いで礼金を支払った。その神号、神社名を授けるために吉田家が各地の神社の神様に宛てて発給した文書が「宗源宣旨」「宗源神宣」で、天皇の綸旨（勅命を受けて書いた文書）に使用される灰色の薄墨紙が用いられ、吉田家の祖先神である天児屋命（あめのこやねのみこと）から伝承したという「神代正印」が五カ所に捺印された。これに添えられた祝詞は黄色の和紙に書かれ、同じ印が二カ所に押されて赤をベースにした錦織の布を張った箱に入れられ、新たな神社名を書いた朱塗りの箱に入れられた幣帛とともに、はるばる京都からそれぞれの地方の神社に運ばれていったのである。

この宗源神宣の入った箱自体が霊力を持つと考えられ、「御位様」と呼んでご神体さながらに大事にし、本殿内に大事に保管して宮司や氏子総代さえ普段目にすることのないものであった。

吉田家から神社名を授けてもらうには二十両ほどのお金が必要であった。別に二両程度の心付けが必要で、さらに領主の許可を得て京都往復四週間程度の旅費もかかった。吉田家からこの宗源神宣を受領されたものは神社の代表者としての地位も確立できたのである。

健大岡神社は天保九年（一八三八）九月四日に焼失し、安政三年（一八五六）に再建された。かつては地面の上にあった本殿も今は床が張られている。本殿は一間社流造りで、グシの真ん中には巴紋、両妻には鬼板が付

き、向拝の両端には木鼻があり、正面の臺又には諏訪社の紋である梶の葉が施されている。

本殿内には御神体の経三〇センチほどの大きな柄鏡（藤原武定銘）、男根様の自然石、一〇本ほどの大小の御幣が入っていた。本殿の両側には明治三十九年の神社合祀令によってもたらされた古い社殿があり、右側社殿内には砂岩の丸石と和鏡、左側社殿内には室町時代の宝篋印塔の相輪部が二個入っていた。拜殿内の本殿側には左大臣・右大臣の木製座像がある。かつて一月七日に御筒粥祭を行い、粥の中に細い竹筒を入れて五穀豊凶を占う「はんじ（判事）」の神占いがあった。

拜殿前には砂岩の灯籠が対で立ち、境内には天神社と舞台が建っている。舞台の板の間には鯉の滝登り、蔦、睡蓮の絵が描かれ、その天井梁には山車の木製車部が残されている。

旧来大岡村には南に正大岡神社、北にこの健大岡神社があつて、明治時代になると樋知神社を大岡四組の村総鎮守として崇敬することを希望したが、健大岡神社だけが明治五年（一八七二）に郷社となったのである。

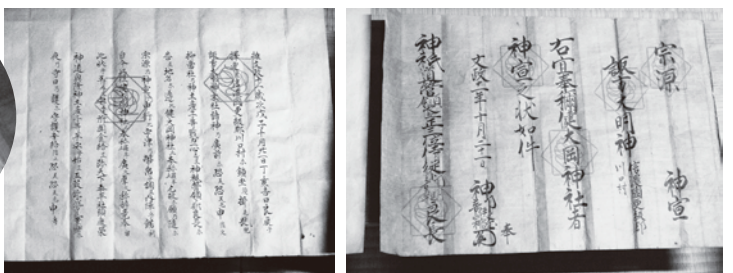
なお、境内には御水滴ノ池があり、大きな鯉が泳いでいる。



御神体の大きな柄鏡の裏面。

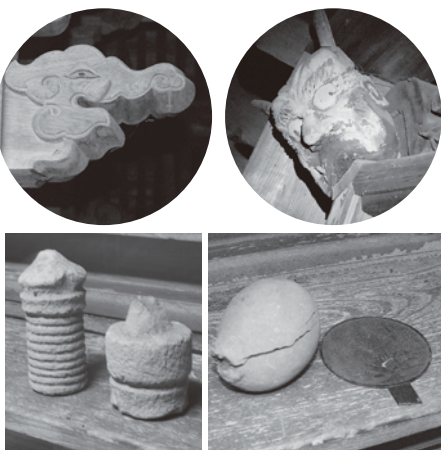
◎薄墨紙に書かれた宗源神宣

文政十一年（一八二八）、「諏方大明神」が健大岡神社に神社名変更されたことを証明する吉田神道家発行の「宗源神宣」。



錦織の布を張った箱に宗源神宣入と一緒に入れられていた祝詞。黄色の和紙に書かれている。

本殿の左右両妻に付いている鬼板と向拝の木鼻（左）正面・左右の臺又彫刻は5ページに写真。



左右の古い社殿内に収められていたもの。

7 川口地区めぐり

船着場 川口（橋木（日原村）昭和八年まで渡船があった。



立地上古くは小松尾城や大岡地域の防衛拠点、江戸後期からは通船も許され、いくつかの橋が架かるまで村外との往来や産物輸送の役割を担った。川漁は投網、釣り、アカシ漁（松根を夜燃やした明かりで、動かない魚をヤスで突く）で、ウグイ（あかうお）、オイカワ（じんけん）、アカザ（さすり）、カジカ、ウナギなどが捕れた。



橋木橋の竣工記念碑。当時の大町町長の筆。

寒き止められた犀川の水が川口まで迫ってきた。

弘化四年（一八四七）の善光寺地震では大岡の他の地区は土砂崩れ被害だったが、川口は水の氾濫被害も大きかった。

↓岩倉の大崩落で犀川が塞ぎ止められ河岸の村が浸水。（絵図の濃色村名）



筆塚 寺子屋文化継承の地。



塩入作右衛門は書と算学に長け文政まで四十余年読み書きをばんを子弟に教えていた。

川口地区全体では寛政十一年（1799）銘や昭和までの各時代に建てられた四つの筆塚がある。川口では他にも近隣の俳諧で指導をする者や寺子屋師匠を輩出している。

本間三左衛門筆塚には門弟で草書に長けた熊井伊右衛門書による師の辞世の句が添えられている。温かな人柄がにじむ句だ。慶応2年、70歳で寂。

「雪解けやよく並びたるつくづくし」

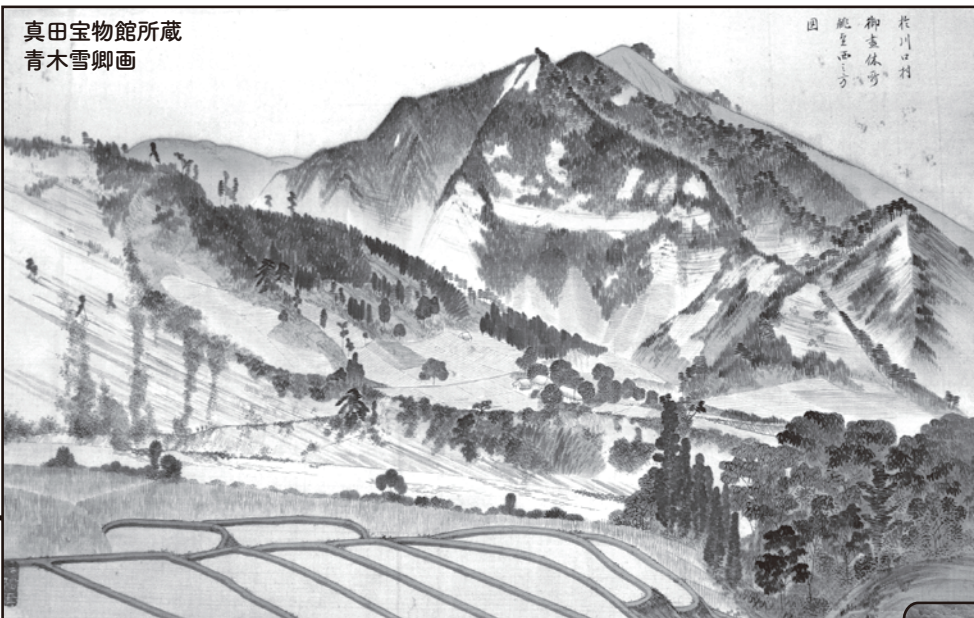
川霧が美味しい作物を育む 特有の川口甘柿。

川口特有の川霧が美味しい柿を育む、川口の名を冠した甘柿は早生種で四角いのが特徴。また、ハチャ柿の畑もあり干し柿も盛んに作られた。



江戸時代に描かれた「御書休所」の風景

川口地域の江戸時代の水田風景は、松代藩八代藩主真田幸貫が、善光寺地震の被害状況を視察した際に、お抱え絵師青木雪卿が描いています。左図の風景は建大岡神社前周辺と思われまます。題名に「川口村御書休所眺望」とありますから、藩主らがここで水田風景眺めながらお昼休憩をとったことがうかがえます。



川口地区。対岸に絵に似た飯縄山を望む。

棚田の先に犀川、震災後のせいか地層のある切り立った断崖が大きく描かれている。

川口 川と陸の要衝

- 大正9年(1920)・・・長野～飯田線 県道認定
- 昭和8年(1933)・・・川口橋竣工
- 昭和11年(1936)・・・橋木橋竣工
- 昭和13年(1938)・・・国道19号線開通
- 昭和27年(1952)・・・大岡～新町線バス運行開始
- 昭和55年(1980)・・・橋木橋竣工現橋
- 昭和56年(1981)・・・川口・置原・日名橋完成



地区センターの東側、犀川が大きく蛇行。

